

いる。

しかし、いかに内容構造が改善されても、教育活動は、教師と生徒との間のダイナミックな人間活動であるから、教師の側にそれを生かすだけの力量がなければ、具体的にいえば、毎日の授業を効果的に実施する方法論がなければ、高等学校教育は改善されない。

一般に、高校教師は、指導方法について関心がうすいといわれているが、ほとんどすべての中学生が進学してくる現実を客観的にみつめ、学習指導のみならず、生徒指導、進路指導等、全般にわたって、指導法の改善に努力する必要がある。

① 学習指導

学習指導は、換言すれば、いかに授業を行うかということであり、授業の改善に、高等学校に関する諸問題の解決の糸口がある。

授業を、狭義に教科学習に限定せず、教科外の諸活動を含めた広い意味でとらえ、その方法の改善を図らなければ、どのような教育内容も定着せず、生徒は3年間通学して、何も得ることなく、高校を卒業していく悲観的状況が継続するであろう。

授業の基本的態度は、生徒の側に立って、計画し、実施することである。これは、自明のこのように思われるが、高等学校における授業の実態は、この点について満足すべき状態ではない。固定した指導方法が、高校教師のひとりひとりにしみついている。それも、科学的、客観的理論に基づくのではなく、それぞれ個人の経験を土台にした方法である。

現在の高等学校の授業は、生徒の実態に応じて教育内容を柔軟に弾力的に取り扱わなければ、おそらく成立しないにもかかわらず、高校教師の指導法には、変化に適切に対応できる余裕がなく、授業は単調なくり返しておおることが多い。

生徒の実態を客観的には握する方法を確立し、その実態に適応した内容を定め、効果的な指導法

によって、いわゆる最適学習を展開するまでには至っていない。

学力不振生徒の指導についての経験が、高等学校教育の中に、ほとんど累積されていないことについては、小学校、中学校の教師たちの協力助言をうけることも大切である。

最近、教育工学の視点から、授業の研究に取り組む学者たちが提供してくれる資料は、われわれの授業研究にとって、たいへん貴重であり、大いに役立っている。教育工学=教育機器という誤解を捨て去り、授業を客観的に観察し、目標にせまる最も効果的な方法を探究するのが、教育工学的発想であることを認識すべきであろう。

現代の教育活動が、基本として、個別化を指向していることは疑いない。しかし、学校という集団の中で、いかにして個別化を図るかについては、学習心理学者も、すべての学校、教師、生徒の期待に応ずることのできる方法は示していない。

学者の諸説を参考にしながら、教師自身の経験を生かして、それぞれの教育現場で、成果をあげる努力が望まれる。

個別化は、授業の方法論だけの問題ではなく、学校における教育活動の全体を通して、教師と生徒の接触の中で、成立するものである。

② 生徒指導

生徒指導ということばのもつイメージは、生徒の生活指導であり、あるいは、風紀取締り、非行防止、校外補導であって、授業をはなれた生徒の生活に関する教師の指導と解されている。

授業は、各教科担当教師の責任において実施され、その他の指導は、かぎられた数人の生徒指導係にまかされて、二つの遊離した組織が、同じ生徒たちにはたらきかけるという非能率的な、共通理解に乏しい指導が行われてきたうらみがある。

高等学校教育における教育課程の意義は、学業指導を効果的に確立していくことにあり、単位制選択制を大幅に取り入れた教育課程の実施に当た